
双子姉妹 少年責め

プロローグ 盗聴

『心（こころ）さんっ、ああ、もっ……』

パソコンのスピーカーから、隣の部屋の声が流れていた。

「本当に律儀なコね。交互に抱いてるなんて」

シャワーを浴びてきた初瀬紫（はせ ゆかり）は、冷蔵庫からビールを出した。一口飲むと、双子の姉である心を見る。心はテーブルで仕事を続けていた。その様子を見て、紫は呆れる。

「もう。圭が引っ越してきて一ヶ月以上経つんだから、いい加減慣れたら？」

姉は白い顔を今日も真っ赤に染めていた。一回、二回目ならともかく、毎日欠かさずに、もう三十回は聞いているのだ。まったく、信じられないくらいウブで羞恥心が大きい。まあ、大学の時も顔見知りの男から告白されて逃げ出してしまった姉なのだから、さほど不思議ではない。二十三になって処女でいるのも当然というべきだろう。

「双子でここまで性格が違うのってある意味奇跡よ」

紫はふと、ちちち、という小さな音が鳴り続けていることに気付く。注意深く耳を澄ますと、音の出所が心のノートパソコンであることがわかった。

「心。バツファ。溢れてる」

あっ、と心は押しっぱなしのキーボードから指を離れた。それからバックスペースで変換待ちの『っ』を一文字ずつ消し始める。思考が鈍っている証拠だ。

『心さん……！』

上擦った声で名前を呼ばれ、ビクツと顔をあげ、潤んだ瞳を壁に向ける。その向こうのベッドに寝ているだろう少年のことを考えて、色々と妄想しているに違いない。極端な恥ずかしがりの割に、想像力は逞しいのだから困ったものだ。圭の頭の中で自分が演じている痴態を想像し、狼狽えてあたふたする姿は、姉として愛らしくもあるのだが……。

「今日はもう切り上げたら」

「う、ん……」

と返事をするものの、心はまだカタカタとゆったりとしたペースで物語を書き綴っている。脳のテンションが上がったまま執筆を続けるから、童話なのに姫様のキスシーンが濃厚すぎる、などという意味不明のリテイクをくらうのだ。

いつそ官能小説を書いてみれば、と提案したことはある。官能小説がどんなものか知らないようなので持っていたものを渡したが、心はカバーのダイジェストを目にしただけで閉じてしまった。あとでこっそり読んでいたのは知っているから、可能性はあるかもしれない。

『あ、イク、心さん、出るっ出るっ……あっっ！』

絶頂の呻き声のあと、激しい息づかいが漏れてくる。心は彼の吐息に合わせて、モジモジと腿を擦り合わせていた。

第一章　く接近く

く1く

「あ、圭くん……」

午前七時。新川圭が部屋を出ると、隣室の初瀬心と鉢合わせになった。ゴールデンウィークも過ぎ、暑さも増してきているとはいえ、朝はまだ少し冷える。今朝の心はロングスカートに七分丈のセーターを着ていた。双子の妹と違い、彼女は落ち着いた感じの服を選ぶことが多い。夏でも胸や背中が開いている服を心が着ているところを見たことがなかった。家事の邪魔にならないよう、今は長い黒髪は一つにまとめている。よくヘアースタイルを変える妹の紫とは違って、彼女の髪型は十年くらい変わっていないはずだ。けれど、優しげで清楚な美貌と色白の肌にその髪型はよく合っていると圭は思っている。むしろ変えて欲しくないくらいだった。

「心さん、おはようございます」

圭がそう言うと、心は頬を染めた。圭の顔を見るのを恥ずかしがっているように、目を合わせてくれない。

「お、おはよう。今日も早いよね」

心は俯き加減のまま、上擦った声で言う。彼女は奥ゆかしいというか、今どき珍しいくらしいの恥ずかしがり屋なのだと言は思っていた。年上なのだが内面から滲み出る可憐さがあり、童話作家という職業は彼女の雰囲気そのままだった。

「一緒に行きますか？」

「あ、うん」

可燃ゴミの日なので、圭も心も透明なゴミ袋を持っていた。持ちますと言いたところだったが、圭は袋と別に野球バッグを持っているので無理だった。

「紫さんは寝てるんですか？」

階段を降りながら、圭は後ろの心に訊いた。

「ううん、もう出たよ。今日は東京の仕事なんだって」

「帰り遅くなるんですか？」

「そんなことないみたい。圭くんは？」

「僕はいつも通り帰りますよ」

クラブ帰りにマクドナルドに寄っていいこうという誘いもあるのだが、圭はいつも断って帰宅していた。

「なら夕飯のリクエストはある？」

「心さんの手料理だったらなんでもいいですよ」

ゴミを決められた場所へ置いた後も、心は圭の後をついてきた。駐輪場で自転車の鍵を外し、かごにバックを載せて、手押しでマンションの前まで行く。

「圭くん、いつてらっしゃい」

心はどこか照れくさそうな笑顔で手を振る。

「練習頑張ってね」

「はい！　いつてきます！」

気合いが入った圭は心に手を振りかえし、一気に自転車を漕ぎだした。

親同士が高校時代の同窓なので、圭と初瀬双子姉妹は幼い頃から交流があった。ただ、マンションでのお隣さんになったのは、圭が進学した今年四月からである。

受験校を決める際、圭は両親の母校で最寄りのH学園を選ぼうとしたのだが、父から反対された。

現在、父の悟はH学園の体育教師で野球部の監督をしているが、三十五歳までは一軍で活躍していたプロ野球選手だった。引退後、大学で取得していた教員免許で母校の教職に就いたのだ。

「新入部員次第だが、残念ながら今は甲　園を狙える実力はないんだ」

と父の悟は反対の理由を語った。T県立H学園は過去、悟を中心にして夏の甲　園に出場し、ベスト4まで進んだ実績がある。だが、最近は特待生制度といったスポーツに力を入れていた私立校に強い選手が集まって、県立や国立校はそういった学校に勝てていない。

甲　園に出場することもまれだ。

「高校野球はエースで四番がいれば勝ち抜いていける可能性がある。だが強いチームメイトがいることにしたのはないんだ。父さんのチームメイトだった投手もプロに入ったようにな」

父の言うとおりだった。主にそれはエラーの個数、失点となって現れるし、相手ピッチャーから点を取らなくては勝ちはない。

「いくつか有名校から誘いは来ているわけだから、その中から選んだ方がいいだろう」

「うん……でも県外だし、一人暮らしになるよね」

「そういう高校だったら、寮生活の設備も充実しているだろう？」

「そうだけど……」

ためらいがちな圭に、悟は溜息一つ。

「まあ、まだ提出期限まで一週間ほどある。お前の問題だ。じっくり考えればいい」

そんなやりとりから数日後の祝日、圭が一人暮らしを決められなかった理由である初瀬家族が来客した。

圭が中三であることは知っていたから、当然、話に出る。

「だったら、ここ、K大付属　校にしたら？」

そう提案したのは紫。

「野球部も強いし、何より、私たちのマンションの隣、来年から空くのよ。そこに入ったらいいわ」

「え？」

「食事の世話くらいしてあげるわよ。心が」

「え、私？　ええ、まあ、二人分も三人分もかわりませんけど」

「ま、私も勉強くらい見てあげるわ」

二人は今年三月までK大生だった。中学や高校もずっと同じだという。性格が違いすぎて、双子より姉妹関係に近いというし、一緒にいても問題なかったそうだ。

「しかし、二人が住めるようなマンションとなると……」

「それは寮とかアパートに比べたら割高だけど……、おじさまのわがままなんだから、それくらいの上乗せ、いいでしょ？」

「うむ……まあ、学費が浮くことを考えれば……」

「なら、私も部屋代、少し出すわ。職業柄っていうか性格的にっていうか、服がたまっちゃって、実は置き場所に困ってるのよ。季節ものじゃない服を置かせてくれたら一万円くらい払う価値があるわ」

「……じゃあ、私も出します」

心も恥ずかしそうに言う。

「私は、本が……」

「もう、底が抜けそうなくらい溜まってるものね。童話作家に本を読むとは言えないし……。どうも私たちって物を棄てるのは苦手みたい」

「ふむ」

考えている顔をしているが、悟はだんだんと反対する要素が無くなってきているようだった。もともとそんなものはないのかもしれないが。

「私は構わないと思うわ」

それまで黙っていた母の一美も頷く。

「完全な一人暮らしさせるのも不安だし。だいいち、長距離通学なんて、馬鹿をいうな、ってことになるでしょ？」

一時間もあれば、集中できる環境で勉強するか練習するかした方がいい。つまりそういうことだ。勉強もスポーツも脳内で情報伝達のネットワークを作り、定着させるということに他ならない。長時間続ければいいということではないが、ネットワークの使用間隔は短い方がいいのだ。

「交通費のことを考えたら、自転車を通える距離にあるのはいいじゃない」

「お前はどうかんだ、圭」

「僕は……、僕もそれがいいと思う」

この憧れの双子姉妹と毎日顔を合わせられることが、そう言わせていた。もしも他の学校で寮生活を始めれば、今のように二週間に一度すらも会えなくなってしまうだろう。

「決定ね？ ……第一志望、K大付属 等学校、と」

紫は進路希望をペンでしっかりと書き込んでしまった。父も母も苦笑しているが、ここまで話を進んだわけだから止める気はないようだ。

「これで来年の四月からはお隣同士ね？」

「あ、はい」

「こちら。こんなに美しいお姉さまとお隣さんになれるんだから、もう少し嬉しそうにしてよね？」

ぐにっ、と横から紫に頬をつままれる。

「う、うれひいですよ」

もちろん、圭は数年前から異性として双子の美姉妹を意識している。けれどその一方で、二人とも七つ年が離れていて、自分とは釣り合いがとれないような大人の女だという諦めもあった。だから、いくら住居が隣同士になっても、姉弟のような今の関係から発展するとは思えなかった。それでも、翌年に迫った高校生活に華ができたことは、言葉通り、素

直に嬉しかった。

く 2 く

「圭、ちょっと来て」

いつものように三人揃った夕食の後、紫はキッチンにいた圭を手招きする。

「あ、はい」

圭は呼ばれて、イスに座っている紫の傍までやってくる。素直に従うところが彼らしかった。

紫は微笑んで圭を見上げた。相変わらず両親譲りの繊細な顔立ちだが、去年より男らしくなってきた。身長も四月の測定で百七十三だというから、十センチ近く伸びていることになる。まだまだ成長期で、そのために体つきは野球部員という感じではない。父の悟から、今の野球選手はタツパがあればあるほどいい、と言われて、伸長を阻害するような筋トレをしていないためだ。

「あの、なんですか？」

紫が黙っていたため、不安そうな顔をする。

「マッサージしてくれる？」

「え、マッサージですか？」

圭は紫の体の上で視線をさまよわせた。肩を揉ませたことはあるが、今回は言い回しが違ったので、どこなのか迷っているようだ。ブラウスの膨らみやスカートから大きく飛び出た腿のすき間で目の動きが止まるのを、紫は余裕を持って観察していた。

「そ。今日、立ちっぱなしだったから乳酸たっぷりって感じなの」

紫はオーバー気味の動作で足を組む。

「じゃあ、足……ですか？」

ためらうような口調の中にわかりやすい期待感が込められていて、ちょっとからかいたくなった。

「嫌ならいいわよ」

「そ、そんなことないですよ」

「無理しないでいいわ。圭も練習で疲れてるんでしょ？　むしろしてもらいたい側よね」

「あ、いえ、練習にも慣れましたから、僕は……」

「そう？　じゃあ、お願いしてもいいのかな？」

「はい、大丈夫です」

「なら、こっちからお願い」

紫は右足を差し出した。圭はしゃがんでためらいがちに紫の素足に手を伸ばす。双子だから基礎は同じだが、後天的な違いは出る。モデルとしてシェイプアップに勤めている紫は、心より引き締まった筋肉をしているので、触り心地はいいに違いない。

「これくらいですか」

「ふふ、もう少し強くしていいわ」

圭は指示通りにふくらはぎを揉み始めた。紫は背もたれに寄りかかり、キッチンを見や

る。予想通り、圭を取られた心が恨みがましい目をこちらに向けていた。姉はこの手の、肉体が接触するコミュニケーションが苦手なのだ。本当は自分もしてもらいたいのだが、怖くて言い出せない。せいぜい一緒に洗い物をしている程度で、断られたら嫌われたと勘違いしてしまうような性格が災いしているのだ。

（……このコの性格考えたら、断られるわけないんだけど）

リラックスしたふりをして目を瞑り、下着を覗けるくらいの微妙な角度まで足を開いた。熱を帯びた欲望の眼差しをちくちく感じて、じわりと肉孔が潤んでくる。パンティーに染みが広がっていくところも見えてしまうだろうか。

「その調子……、はあ、気持ちいいわ」

紫はうつとりとした声でつぶやいた。

時刻は十一時半。今日もまた、スピーカーから圭の喘ぎ声が流れ始める。

「今日も順番通りみたいね」

今夜のオカズは紫のようだ。

「行ってみようかな。圭の部屋」

「え……？ えっ？」

心は立ち上がって大げさに驚く。実際本心から驚いているに違いないのだが。

紫としては今の思いつきではなく、夕食を食べているときくらいから決めていたことだ。高校にも慣れたようだし、手をつけるならそろそろだと思っていた。最初からそのつもりで、K大付属 校への進学を提案したのだから。

紫は壁に掛かったコルクボードのところへ行き、三人が写った写真の隣にぶらさがっている鍵をとる。圭から預かっている、圭の部屋の合い鍵だ。

「ちよつと紫！」

「姉さんも来る？」

「え、私、そんな……」

「聞いてたら？」

紫はパソコンを指差して、玄関を出た。

圭の部屋はすぐ隣だ。

紫は上下に並んだ二つの鍵を順に開けた。圭がチェーンロックをかけていないことは事前に確認済みだ。夜這いを期待しているのかもしれない。紫は静かにドアを開け、同じ間取りで違う匂いのする部屋にあがった。

「圭、いる？」

紫は寝室のドアをノックする。そして、返事の前に開けた。

「うわぁっ！」

ベッドの上でズボンを引きあげている圭の姿。紫は理解のある表情を意識的に作った。

「あら、ごめんね」

「ゆ、紫さん！ ど、ど、どうしたんですか、こんな時間に！」

圭はベッドの上に正座した。可哀想なくらい慌てている。股間のものは縮んでしまったに違いない。

「明日の最高気温。28度だって。それでちょっと薄い服出させてもらおうと思って」

「あ、あ、は、はい、どうぞ」

とつてつけたような理由を、圭は信じたようだ。勢いよくベッドを飛び降りると、ドアの傍にいた紫の脇を駆け抜けて隣の部屋のドアを開けた。明かりをつける。

「いやになるわよね、まだ五月なのに……」

紫はその部屋に入った。山積みになっている段ボール箱は心のものだ。実は、心では持ち上げられないくらい重かったりする。

紫は夏用の衣服がまとめられた洋服ダンスの中から、適当に二着ほど選んだ。

「これでいいわ。ありがとう」

「いえ、そんな、お礼を言われるようなことじゃ……」

部屋の入り口に立っている圭は、なんとなくばつが悪い顔をしている。思春期の男子がオナニーを見られて動揺しないことはまれだろうけれど。

「ふふっ、そうね。じゃあ、さっきの、マッサージのお礼をさせてもらおうかな」

「え？」

「オナニー。まだ射精してないんでしょ？」

紫は空気を握った手を上下に動かす。

「あ、あの……それは……」

「出すの、私が手伝ってあげる」

「ええーっ？」

紫は悲鳴のような声を上げた圭の背中を押して、寝室に入った。

「こっち向いたらだめよ」

圭の背中にバストを押し当て、抱きついたような格好で耳元に囁く。

「は、い……」

胸に回した手から破裂しそうなくらい高まった鼓動が伝わってきた。全身は緊張からガチガチだ。紫は手を徐々に下腹部に向けて落としていく。

「あっ……！」

寝間着の上から肉茎を撫でられて、圭はびくんと全身を震わせた。紫は本気であることを諭すように、まだ完全でない勃起を手のひらでこね回す。途端に体の緊張が弛んで、手の中に若い血液が集まってきた。どんどん膨張していく。

「圭ったら、意外に立派なもの持つてるじゃない」

形を確かめながら、紫は微笑む。大きな感触だ。

「はあ、は……そ、そうですか？」

圭は同級生や先輩たちと自分のサイズについて話したことはないようだ。尊敬までではなくても、憧憬の眼差しで見られただろうに。

「私の好みのサイズよ。ちゃんと剥けてるのかしら？」

「それは、だいじょうぶ、です」

「じかに触っていいわね？」

「お、お願い、します……」

紫はクスクスと笑いながら、寝心地のよさそうな素材のズボンを膝まで引き降ろした。飛び出てきた肉竿をすくい上げるように白い指を巻き付ける。

「くっっ」

刺激が強すぎたのか、圭は呻いて上半身を折り曲げた。ペニスを握っている紫の右手首を押さえる。引き離そうとしているわけではないが、加減のわからない他人の意志が怖いのだろっ。

「かたいわ、カリも高いし……一番元気がいいときよね」

予想通り、圭の怒張は十五センチはあった。ほとんど垂直にそそり立っていて、とても熱い。

（心にはちよつときつい太さよね）

先のことを想像して、紫はほくそ笑む。

「動かすわよ。手を離して」

「でも……」

「すぐにイっちゃうのがイヤ？ 怖いのか？」

溢れている先走りを指先ですくい取って、ソフトなタッチで裏筋に塗り広げた。当の肉棒は正直に、びくびく切なそうに震えている。異性の手で、それも憧れの年上の女性に触られているだけで、圭がぎりぎりまで興奮しているのは間違いない。

「最初はゆっくり擦ってあげるわよ。我慢はできるだけしたらいいの」

言葉通りに、指を添えたくらい感覚で動かす。圭が擦っている時の力の五分の一くらいだろっけれど、快感は二倍にも三倍にもなっているに違いない。秘部を弄ぶ他人の手や息遣いは、それほどの興奮を運んでくるものだ。ましてや初めての体験となれば。慣れてしまえば、その興奮の高みは二度と味わえない。

「どう？ 自分でするとどっちがいい？」

胸を左手で撫でながら、若干しごく力を強くして訊く。

「うっつ、ゆ、紫……さんにつ、されるほうが、ずつと……気持ちいい、です」

圭は色欲に染まった、余裕のない声で答えた。まだ少年の年齢とはいえ、男を悶えさせる快感に紫は背筋にぞくぞくしたものを感ずる。じゅっ、と一気に秘裂から愛汁が染み出してきて、パンティーを濡らす。

「そっだ。ね、圭は、私と心、どっちがスキなの？」

「……え、それは……その……」

「言わないなら、もうやめちゃうわよ」

紫はからかい口調で言いつつも、早々と動きを止めてしまう。

「あ、や、やめないで……あうっ」

一回だけ強くしごいて、催促する。

「どっち？」

「ゆ、紫さん……」

「そんな声じゃ聞こえないわ」

（……姉さんにね？）

と心の中で付け加える。

「紫さん！ 紫さんがいいです！」

肉声でも隣室に届いてしまいそうなくらいの声で圭は叫んだ。

「いいコね。じゃ、いっちゃあつか？」

紫は左手を亀頭にかぶせた。

サオを右手で勢いよく扱いて、左手は膨張していく海綿体をこね回す。手加減も何もない。ただ暴力的な快感を送り込む。

「あつ、やつ、あつ、そんなに、そんなに、し、したら、すぐ……」

「いいのよ、たつぷり手の中に出しなさい」

「ああ、イクつ、紫さん、紫さんの手にっ、あうっうっ！」

圭の全身に力が入り、指を弾かれてしまうかと思うほどにペニスが膨らむ。上下に肉鞘を擦っていた手を根本へ向かって引つ張り込むと、肉の砲身が大きくしゃくりをあげた。煮えたぎった精が亀頭を包んだ手の表面に炸裂した。火傷をするくらい熱い粘液が、少ない隙間から溢れて指まで伝ってくる。

射精のわななきが終わり、ドロドロの男汁でまみれた手で亀頭を擦っていると、圭は苦しそうに腰を震わせた。紫がペニスを解放すると、圭は息も絶え絶えにベッドへ倒れ込んだ。

紫はゼリーのように濃い圭の精液を指の間で弄ぶ。漂ってくる濃厚な男の香りに、頭がくらくらした。膣が疼いていて、男の体温で鎮めたくなる。

（だめよ、もうちょっと我慢しないと……）

紫は足下に放置していた服を無事な方の手で拾い上げた。

「おやすみ、圭」

「あ……はい、おやすみなさい、紫さん」

紫は、とろりとした目つきの圭を見て満足そうに寝室から引き上げた。

くく

帰ってきた紫と目が合った。

情事の後だとわかってる妹に、どういう顔をすればいいか、心はわからない。

「どうしたの？ あ、もしかして期待はずれだったとか？」

紫は首を傾げて微笑んだ。

「最後までいくと思ってたんだ」

「そ、そんなんじゃ……」

心はむつつりと頬を膨らませる。

「あ、圭が私の方がスキって言ったから、嫉妬してる？」

「ち、ちが……」

心は俯いて、紫が出ていく前とまったく内容が変わらないディスプレイに視線を落とす。

（……あつ）

心は画面がスクリーンセーバーに切り替わっているのに気づいて、慌ててマウスをいじった。そんな動きをきちんと見ていたのか、背後で押し殺したような笑い声が漏れる。

「ねえ、心？」

首に腕が巻き付いてきて、頬がひつついた。

「……なに？」

心は横目で同じ高さにある妹の顔を見た。同性で、しかも妹なのに、間近にある顔にど

きりとする。最近は見ると、紫が大人の魅力に溢れていることを痛感する心だった。
（圭くんだって……大人の女のほうがいいに決まってる……エッチなことも、してあげられるんだから……）

自分が幼稚な子供でしかないとあって、少し悲しくなった。さっきの紫の言葉も図星だったのだ。圭の心が、急角度で紫に傾いてしまったように思う。

「いいものあげるわ」

「なに？……あつ」

いきなり、嗅いだことのない匂いが鼻をついた。

異臭とも思える匂いの出所は紫の指先だった。

そこには白い粘液が張り付いている。

その指が、その謎の液体を塗りつけるように、心の唇を念入りになぞっていく。

微かな苦みが口の中に広がった。

「圭のザーメンよ」

顔を固定していた腕が離れたので、心は啞然とした顔で妹を見上げた。紫は指に残っていた白濁を美味しそうに舐め取ると、意味ありげな視線を残して心に背を向けた。

「シャワー浴びてくるわ」

紫の背中がバスルームに消えた後、心は、そつと唇に触れた。

ヌルリと、指先に白い塊がへばりついてきた。そのグロテスクな白濁液に一瞬たりとて嫌悪感を感じなかった自分を、心は不思議に思う。それどころか、それがまるで透過した極上の宝石であるかのように心惹かれるものを感じてさえいたのだから。

理由なんて、一つしかなかった。

「これ、これが、圭くんの、せ、精液なんだ……」

声に出すと、発散の方法を忘れてしまった頭に熱が籠もり始めた。心拍が激しくなると、頭の表面で一斉に何かが弾ける。目の前が白く染まったように錯覚してしまうくらい明るさだった。

心は指先を鼻に近づけて、栗の花にも似た濃厚な精の香りを胸いっぱい吸い込んだ。

「これ、圭くんの匂いなの？……すごい」

匂いを覚えた心は、上唇を下唇に丁寧に重ねた。口の中に若い精の残滓を含んでいく。苦いはずなのに、甘くすら感じられる。舐めた液体に媚薬にも似た効果があるかのように、心はどんどん興奮していく自分を自覚していた。

（ああ、私、がまんできない……）

イスの上で控えめに股を開き、左手でスカートの裾をたくし上げた。股座が湿り気を帯びた白のショーツを思い切り端に寄せる。

「はあ、はあ、はあ……」

心は生の精液がついた右手の人差し指を、衣服に触れないように慎重に潜り込ませていた。指の圭のペニスに見立て、秘裂に近づいてくる様を描く。

（もうちょっと……圭くんの精子が、私のに、触っちゃう……）

「くふあつ」

指が秘所に触れた瞬間、バチツと感電したような痺れが下腹部に広がった。

いつもと違う感触だった。

指に付着している粘液のせいだ。冷めているはずなのに、融解したての金属のように熱かった。愛液と混じり合って、胎内にじわじわと染み込んでくる。

「ふうっ……ん、ん……」

ほんの数ミリはみ出した肉貝の間を指一本でいじりながら、心は泣き声のような甘い吐息を漏らした。したこのないセックスを想像して、甘い気分でいっぱいになる。

普段通り指は膣口に入れることはしなかった。ただ表面の肉を撫でていくだけ。それでも十二分に、これまで感じたことがないほどの悦楽を味わうことができた。

（で、でも、足りないの、もっと……）

心の自慰は次第に激しくなっていく。

スカートを握り締めていた左手を離すと、さらに深く大きい快感を味わおうと、服の上からお椀型の胸肉を揉みしだいた。

「圭くんっ、好き……好きなのっ……もっと、いっぱいして……！」

刺激が強すぎて触れるのが怖かった肉芽にも積極的に指を這わせた。

「ひ、いつ、ひああああ！」

膣の奥から背骨を突き上げてくるような快感に、腰を突きだして、顎を跳ね上げた。

そのとき、前触れなく、腰にかかっていた体重が消える。

「うあ、あああっ！」

心は椅子から滑り落ちていた。幸い敷いていたクッションと一緒に落下したので尾てい骨にダメージはなかったが、まぬけとしかいいようがない。

興奮が少し冷めて、内股を伝った淫汁がスカートとクッションに大きな染みを作っていることに気づく。もともと濡れやすく、量が多い性質なのだ。他人と比較したことはなかったが、心自身もそう思っている。

クッションをいそいそと抱え込んだ。紫がないときに洗うことに決める。

（ひよっとしたら、紫も……こんなに濡れちゃうのかな……？）

なんとなく、心はそんなことを思いつく。

だが紫へ思考は次の瞬間、嫉妬に取って代わられた。

（紫はいいなあ。思ったことができて……）

その中心にいるのは、やはり圭だ。

（わ、私だって……、圭くんと……）

そうは思っても、平静に戻れば、実行は到底不可能だということはよくわかっている。

（でも、ぐずぐずしてたら……）

絶頂の余韻に膣がひくひくと震えていた。

第二章　く嫉妬く

く 1 く

昼前の授業が終わって体を伸ばした圭は、窓際がちょっとざわついていることに気づく。
「なにかある？」

学食へ一緒に行く友人の席に行つて訊いてみる。彼は窓際の席だ。

「ああ、あの人だよ」

圭は彼の指先を辿って、二階の窓から外を見下ろしてみる。

あつ、と圭は短く声を漏らした。

私服の女性が不安そうな表情で時々校舎に目を向けては、落ちつきなく歩き回っている。
何か包みを抱いて、迷っているようだ。

（……あれ、心さん……だよな）

「ファッション誌の表紙に載ってたモデルだと」

「え？　ああ」

周りを見ると、男子よりもむしろ女子の方が彼女に注目していた。

（まあ、双子だし……）

モデルをしているのは紫の方だ。

彼女は今週号の女性ファッション誌の表紙にいたはずだ。数年前から紫は、自分の写真が掲載されている雑誌を圭にくれるのだ。マスターベーションのネタにしているとは言えないが、彼女はそんなことくらい、お見通しかもしれない。

「四年前のミスK大だろ」

後ろからそんな声も聞こえる。

「票をほとんど独占したんだよ」

それも紫の話だ。入れさせられたから、圭にも覚えがあった。圭の一票など関係なくダントツだったのだが。水着審査の時の写真は、まだ大切に持っている。

「そのとき、事務所の人にスカウトされてモデルになったってさ」

黙って聞いていたが、いくらK大付属　校に通っているとはいえ、よく知っているものだと感じる。

「お前、よく知ってるな」

「オレんこの姉貴が、そのミスコンで屈辱的な敗北を喫したのさ」

「ゼロっすか？」

「オレも、あのヒトに入れちまったし。それで姉貴にはあとでさんざん文句言われた」

「そりやそうだろ」

「オレもそんなときまでは姉貴ってけっこういけてると思ってたんだよ、子供心にさ？　けど、オーラが違つて言うの？　他の参加者がピンぼけする感じだったんだよ。ま、実際、両隣の参加者が比較されたくないからちよつと離れてたってこともあるけどな」

「ふーん。でも、たしかにキレーだよな。好みかもー」

「でもなあ、なんかあんとときとイメージが違う気がするんだよなあ」

「四年も経ってるんだろ？」

耳に入ってくる会話を聞きながら、圭はふと我に返る。
母校とは言え、用があるのは、おそらく自分だろうと思う。
ちよっと、と断って圭は教室を出た。

「あ、圭くん」

圭の姿を見つけた心が、安堵の表情で駆け寄ってきた。

「心さん、なにしてるんですか？」

「あのね、お弁当作ってきたんだけど……」

圭に持っていた包みを差し出した。

「ほら、お昼は学食でラーメンとかうどんばかり食べてるって、前に言ってたから」

心は不安がちの目で理由を付け足した。

「僕のためにわざわざ作ってきてくれたんですか？」

「迷惑……だったかな」

「そんなことありませんってば。遠慮なく、いただきます」

圭はありがたさを込めた笑顔で弁当を受け取った。

「それで、え、と……」

「え、何ですか？」

「あ、いいです。なんでもないので。それじゃ、勉強とクラブ、がんばってね」

「あっ！ 待って、心さん！」

あることに気づいて、圭は心を引き留める。

「な、なに？」

「だって、それ」

心の手の中に、もう一つ包みがあった。明らかに圭のものより小さい。中身は女性用の弁当箱だろう。

「あ、うん……」

圭が指さすと、心は照れたように視線を下げる。

「どこかで一緒に食べますか？」

「ほんとに？」

笑顔が弾ける。返事はそれでわかった。

「じゃあ、どこがいいかな……」

あまり目立たない場所の方がいいと思うのだが、普段外で食べてないだけに思いつかない。
い。

「私が決めてもいい？」

「あ、いいですよ」

野球場の先にある木陰まで二人は歩く。

「あの、心さん」

食べ終わった後、圭は何気なく訊いてみる。

「今日はどうしたんですか？」

「え、どうって？」

「今までこんなことがなかったし……。何かあったんじゃないかって」

心は目を瞬かせて、頷いたように見えた。

「……圭くんを、紫に取られたくないから……。私にできること、したかったの」

え、と圭は思わず声を出す。聞き間違いかな、とさえ思った。だって、それではまるで、圭のことを好きだと言っているように思えたあから。

圭は言葉の確認を取ろうとするが、心はその前に自分の世界に入っていた。ためらいつつ、相手の反応を見ずに自分が言いたいことだけを言う。

「私、紫みたいにエッチなことできないから……」

「え……」

さっきより小さな声で早口だったが、今度ははっきりと聞きとれた。思わず絶句する。

「じゃあ、紫さん、心さんに話し……」

あっ、と心は顔を上げ、開いた口を押さえた。

数秒の気まずい沈黙の後、心が両手で胸を押さえる。痛みを堪えるような仕草だった。上目遣いで、震える声で、訊いてくる。

「ね、ねえ、圭くん。紫のこと、好きなの？」

「あ、いえ、僕は……」

どう答えていいかわからなかった。紫のことはもちろん好きだが、今はどちらか一方に感情が傾斜していることはないと思うのだ。二人は性格は全然違うけれど、同じくらい惹かれていて。二人とも魅力的で、好きなのだ。

「その、僕は別に紫さんと付き合ってるとか、そういうわけじゃないから……。昨日のだって、たぶん、紫さんにとっては、いたずらみたいなものだと思うし……」

圭はしどろもどろになる。肝要なことは何も答えられていない。言い訳にしか聞こえないかもしれない。

（もう腹をくくった方がいいのかもしれない）

今までは釣り合わないと思って押し殺してきた。今もそう思っている。けれどやはり、同級生の女子たちにまったく興味を持たないくらい、好きなのだ。

圭は姿勢を正した。基本的に奥手なのでためらいはあったが、口にする。

「僕は……心さんも、紫さんも好きなんです。二人とも特別な人なんです」

心は驚いたように見返してくる。

「ほんとに？ 私のことも？」

「はい。おかしいかもしれないけど……」

圭が頷くと、心は何度か深呼吸した。落ち着こうとしているはずなのに、逆に、彼女は赤くなっていく。

「昨日、紫と、き、キスしてたの？」

「し、してませんよ！」

「だったら、し、していい？」

「な、何をですか？」

「キス……圭くんと、キス、していい？」

「あの、え？」

心臓が激しく高鳴ってくる。たぶん、同じことを紫に言われたらここまで動揺しないよ

うに思う。心は普段控え目であり自分の意見を言わないから、かえって真剣さと本気さを感じさせるのだ。

心がゆっくりと肩を寄せてくる。

「あ、あの、震えてますよ。無理はしない方が……」

「ううん、恥ずかしいだけだから……。圭くん、目つぶってて」

「あ、はい……」

素直に圭は目を閉じる。

「こっち、向いて……圭くん」

震えた声の指示に従う。息づかいが間近に感じられ、その逡巡も多分に伝わってきた。

まだかなと思っていると、柔らかな感触が唇に触れた。

その途端、勢いよく二人の間に風が流れて、圭は目を開ける。

ばたばたと弁当箱を抱いて、心が勢いよく立ち上がる場所だった。

「じゃ、じゃあ、私、帰るね！」

目を合わせないようにして、心は校門の方へ駆けていった。

圭は自分の唇に触れる。

一秒にも遙かに満たない口づけ。

ファーストキスは卵焼きの甘い味だった。

（2）

「圭くん、いらつしやい」

「お、お邪魔します」

二人は玄関でいつものように恭しい挨拶を交わしていた。

「いい匂いですね。カレーですか？」

「う、うん。海鮮カレー」

しかし、伝わってくる雰囲気は少し違う。

特に心が、もう、相当に恥ずかしがっている。

二人が互いに意識しているのを敏感に感じ取って、一人リビングにいた紫はクスリと笑う。

（ふふ、何かあったかな？）

鏡餅のように置いてある弁当箱。帰宅してからキッチンにつまみ食いしに行った紫は、弁当箱に入れたおかずの残りがあっても知っている。心の行動は容易に想像がついた。

（ま、あの様子だとキスくらいしたかな？）

圭はいいにしても、心が高校生のような恋愛心理でいるのがおかしい。いや、心に恋愛経験はないのだから、それ以下かもしれない。中学生級。最近の中学生なら、初エッチした同級生と顔を合わせても、別に恥ずかしがったりはしないだろうけど。

戻ってきた心は顔を真っ赤にしていた。

紫はあらためて、姉の貴重さを実感する。長い黒髪と合わせて、大和撫子の称号を与えてもいいくらいなものだ。

二人の性格がここまで違うのは、五、六歳の時に聞いた母の恋愛話が大きく影響している。

それまでほとんど同じ思考、性格だったのに、その話を聞いた日を境に別々の道へ分かれたのだ。

話を聞くきっかけは、母が高校時代の友人として、圭の両親の結婚式に招待されたことだ。出席後、父と母の結婚のいきさつに、心も紫も興味を持った。それは子供なら、一度は両親に訊くことだと言ってもいいだろう。

そのときの母の話は、父と知り合う前、高校時代のことまで遡った。

「実はお母さん、負けちゃってねえ」

母はそう前置きして話し始めた。

圭の父と母、それに紫たちの母親はクラスメートだった。当時の圭の父、新川悟はH学園のスター的存在だった。プロのスカウトに注目されていたし、ルックスも抜群。女生徒にとっては憧れの存在だった。

そのとき、悟の彼氏に立候補した二人が、圭の母である一美と紫たちの母の緑だ。二人は親友同士で、緑は応援団、チャリーディング部に所属し、一美は野球部のマネージャーだった。

告白したのは、緑が先だった。何回かデートをして、感触は悪くなかったように思えたそうだった。

しかし、結局、交際は断られた。その数日後、緑は彼と一美が付き合い始めたのを知った。緑の落胆ぶりは相当なものだった。親友だと思っていた一美に悟を奪われ悔しくもあったし、悟に遊ばれていたのだとも思ったらしい。

その後、H学園は夏の甲 園の出場を決めたが、そのときすでに緑はチャ部をやめていた。表向きは受験のため。実際、彼女は夏休みを勉強だけに注ぎ込んだ。

緑は大学に入学すると、両親の反対を押し切って、米国留学を決める。吹っ切るために、違う匂いの空気を吸いたかった、というのが緑の弁。

まさしくその留学が緑の人生に大きな影響を与える。

商社マンだった二十六歳の康成と知り合うことになったのだ。ベタベタな二人の恋愛話はさておき、緑は二十歳で学生結婚。大学を中退し、二十二で心と紫を出産した。

それから五年後。緑が悟に告白していたことを知らない一美から、結婚式の招待状が届いた。そのとき緑は幸せだったので、遺恨無く、新川悟と一美の結婚式に出席したわけだ。心と紫が一日かけてこの話を聞いたとき、インパクトがあったのは、もちろん前半。

そこまでは共通していたが、感想を話し合ったときに、感じ方が正反対だとわかった。

姉は恋に残酷さを感じて、恋に臆病になった。

妹は恋に駆け引きなどの面白さを見出して、恋に積極的になった。

これが二人の性格の分岐点。

「明日、練習試合があるんですけど……よければ見に来ませんか？」

食事中、紫と心の顔を交互に見て圭が言う。

「え？ 圭まだ一年でしょ。出番あるの？」

「三校が集まって、二試合ずつやるんですよ。僕は二試合目の先発が決まっています」

へえ、と紫は相づちをうつ。実力校の中にいて一年で先発を任せられるなら、将来を期待されているのは間違いない。

(それにしても。圭って野球については、けっこう自信家なのね)

ポジションはピッチャー。出来不出来がもろにわかる。ぼこぼこに打たれば、立つ瀬はない。

「わ、私、お弁当持って行くね?」

微妙に先走った心に、紫は溜息をつく。

「圭が先発の試合、何時からの予定なの?」

「あ、午後の一試合目です。午前の試合にもよりまずけど、たぶん、昼食の後で、一時くらいになると思います」

「お弁当……って、いるかな?」

「自由だから一緒に食べられますよ」

「じゃあ、作って行くね?」

「はい、楽しみにしてます」

「試合の場所は?」

「ホーム……K大付属 校の野球場です」

なぜだか、そこで心が落ち着きを失う。

「紫さんは予定あるんですか?」

「仕事」

「そうですか……」

圭が残念そうな顔をする。可愛い。

「私がいなくても大丈夫でしょ。他に同級生の女の子も誘ったんじゃないの?」

「誘ってません!」

「あらそう。でもチアリーディングは来るわよね?」

「みたいです」

「この時期だから、甲 園出場したときの練習ね。何校か合同の」

「紫さん、元チア部でしたよね?」

「さすがにもう踊れないけど、あれ持って行くわ」

紫は壁に掛かったダブルバットを指した。ドラゴンズファンの母の影響で野球観戦はそもそも好きなのだ。ちなみに、ドラゴンズは圭の父が所属していたチームである。

「え、じゃあ来られるんですか?」

「期待を裏切るのも悪いしね。たぶん抜けられると思うわ」

皿を空にし、スプーンを置いて、紫は立ち上がる。

「ごちそうさま。ちょっと出てくるわ。遅くなると思うから」

「あ、うん。いつてらっしゃい。気をつけてね」

紫は一度自分の部屋に戻ってから、外へ出た。

ガレージで車に乗り込んだ。

頭の後ろで手を組み、薄暗い車内でしばらく待機。

性格が違っていても、紫は心の考えていることがだいたいわかるのだ。

携帯電話を出して、つぶやく。
「お楽しみタイム、かな？」

くく

二人きりになると、やはり昼間のことを大きく意識してしまう。
心の視線は、キスをした圭の唇に集中する。

圭もカレーを食べ終わっていた。彼の視線も自分の唇に向けられているように感じて、恥ずかしい。けれどどこかむずがゆい甘さがある。

二人は数分間くらい、黙って座ったままでいた。
気まずくはなかった。

その間で、心の中では急速に決意が固まっていく。
（今なら、今しかない……よね？）

それから心は口を開いた。

「あのね、圭くん……」

「な、なんですか？」

「紫……が、したみたいに、して、いい？」

「えっ！　そ、それって……！」

心が言うのと、圭はキスの時より遙かに大きな驚きを露わにする。

「……うん。圭くんのお、おち×ちん、擦らせて……？」

声に出すと、痛いくらい鼓動が早くなった。

（い、言っちゃった……）

「あの、その……」

圭は目を彷徨わせる。

嫌がっているような素振りに、心の胸が痛む。

「だ、だめ……なの……？」

「そうじゃないです！」

圭は首を勢いよく横に振った。

「ただ、その……紫さんが、したからって、心さんが無理すること……ないと思います」
「で、でもね？　それで紫を好きになっちゃうこともあるかもしれないから……！」

心は自分を鼓舞するように、勢いよく立ち上がった。
不思議と足は震えなかった。

心は仁王立ちしている圭のズボンを下ろした。

続いて、ボクサータイプのブリーフに手をかけた。唾を飲んで、ずり下げていく。
「きゃっ！」

突然、目の前で何かが跳ねて、心はブリーフから手を離して悲鳴を上げた。

睨ってしまった目を、ゆっくり開けていく。その物体が色と形を露わになる。凄まじい衝撃を受けた心は両手を口に当てた。

（これが、圭くんのおち×ちゃん）

男性器そのものを見るのは、初めてではない。父親とお風呂に入っていた頃は、さほど怖さもなく、目にしていた。

初めてなのは、ペニスが欲望にそり立った状態にあるということだった。

（すごい。こ、こんなに、おっきいの……？）

視界いっぱい広がった青筋だったサオ。肉茎の先端で咲いた赤黒い頭。両手を使っても包みこめないくらいの長さで太さがあるその肉の棒は、心の視線を受けて、ときどき圭の下腹部の上で飛び跳ねている。

歪でグロテスクな形状なのに、心惹かれる。

「さ、触る、よ？」

「はい……」

圭の同意を得ると、心は熱の勢いに身を任せて、勃起に手を伸ばした。

真ん中辺りにしっかりと指を絡めさせると、圭が息を漏らした。もう片方の手では先端辺りを包む。

（熱い……それに、脈打ってる……）

心はにぎにぎと手を動かして、感触と堅さを確かめた。剥き出しになっている先端以外は、意外と表面の皮が動くことを知る。

（それで、しごく、っていうんだ……）

心は肉茎を軽く握って、上下に動かし始めた。こもるような呻き声が上がって落ちてきた。

「だ、だいじょうぶ？ 痛くない？」

「……は、い……気持ちいいです。もっと、強くしても、平気です」

勇気づけられて、心はぎこちないながらも茎を握った右手を早く動かす。

「心さん……すごく、いいです。ああ……」

（圭くん、私の手で、気持ちよくなってくれてるんだ）

どうしたら、もっといいのか考えた。透明な液体を滲ませている亀頭の割れ目を見て、その知識を思い出す。

「……な、舐めていい？」

「舐める、って……？」

「ふえ、フェラチオ……って、言うんでしょ？ 初めてだから、下手だと思うけど……」

圭の喉が動き、小さく顎が動いた。

心は血液が充満したペニスを固定して、顔を近づける。圭は家に帰ると、シャワーを浴びて汗を流すので、匂いはきつくなかった。

ポツツと新しく膨らんだ珠を、舌ですくい取る。

「いつ、くっ……」

敏感な部分をざらついた粘膜で擦られた圭は、自分のシャツを握り締める。

心は舌の上の粘液を味わうと、今度は亀頭のふちを舐めた。圭の腰が震える。男の一番敏感な場所に、自分がどれだけ強い刺激を与えているか、余裕も経験もない心にはまだわからないのだ。

心はできるだけ大きく口を開けた。

赤黒い先端を頬張る。それだけで口の中がいっぱいになった。

「うあつ、心さっ……！」

「ふぐ、んむ……」

舌の上に乗った圭の男根がさらに大きくなったような気がした。

「んっ、ん、んぐ……」

その圧倒的な存在感に息苦しさを覚えながらも、心は圭をできるだけ深く銜え込んでいく。嘔吐感に涙が滲んで、限界だと思ったところは、しかしまだ肉棒の三分の一にも達していなかった。

心は頬をすぼめ、顔を徐々に引いていった。本能的に分泌された唾液で鈍く光る肉塊が、目の前で体積を増やしていく。

「すご、い、です……、心さんっ……」

そして唇がエラに引っかかり、擦り上げたときだった。

「うああつ、心さんっ！ イクッ、出ちやいます！ あああつ！」

声変わり前のような甲高い悲鳴とともに、圭の腰が勢いよく突き出された。

「んぶっ、んぶううっ？」

腰と共に前進する肉棒が、逃げる時間を与えない速さで、ぬるぬると舌の上を通過していく。自分の意志で含んだ倍くらいの長さ、口腔に突入してきた。同時にペニスが膨張し、大きく飛び跳ねて、先端から熱液が噴出した。

「んんっ、んんんっ！」

覚えのある生臭い匂いを放つ液体が、喉奥を直撃した。心は思わず逃げようとしたが、いつの間にか後頭部を圭にしっかりと押さえられていて、できなかった。必死に嚥下しようと喉を鳴らせるが、濃厚な精は喉の粘膜にへばりついてしまっていて、なかなか飲み込めない。その間も、圭の激しい射精は続いていて、口内に注がれる精液の量はいつこうに減る気配を見せない。心は若い精の勢いにただただ圧倒され、圭のたくましい両腿にしがみつき、半泣きで吐精を受け止めることしかできなかった。

「うう、あ……」

陶酔した呻きが聞こえ、数十秒も続いた射精がようやく収まる。

頭を解放されると、心は床に両手をついた。

「げほっ、ごほっ……うえっ……」

咽せかえり、木目の浮いたフローリングの上に、圭が放った白濁がボタボタとこぼれ落ちていく。落ちた液体の中にはいくらか涙も混ざっていた。

「ごめんなさいっ、大丈夫ですか！」

心が咳き込んでいると、背中の手が添えられた。

青い顔をした圭が目に入って、心は無理やり微笑んだ。

「平気。びつくりしただけ」

「本当にごめんなさい、僕……だすとき、頭が真っ白になっちゃって……」

「けほっ。うん、なんとなく、わかる……」

心は唇を拭って、唾液で薄まった精液を呑み込んだ。

胸を押さえて、息を整えた。

「圭くん、気持ちよかった？」

「はい、すごく……。でも、すぐ、出しちゃって……。恥ずかしいです」

圭は本当に耳まで赤くしていた。慌てて出しっぱなしの性器を衣服で覆う。

それを見て、心の方も恥ずかしくなった。それほど破廉恥な行為だったことに、今さらながら気付いた。舌の上に残っているいがらっぽい味を感じて、圭がそこで射精したこともあらためて認識した。

（出るところ、見たかったかも……）

心は自分の着想に、首を勢いよく振り回す。

「あ、拭かないと……」

圭が床にできた濁った水たまりを見て、ティッシュペーパーを持ってくる。

「だめ、そんなので拭いたら……」

心はその行動を止めた。

「捨てたら匂いが……。紫にばれちゃう」

心はふきんを持ってくると丁寧に拭き取った。お湯でしつかりと染みを洗い流す。

「あ、えと……」

キッチンから戻ってきて、なぜか圭と向かい合うポジションに立ってしまった。二人とも俯いて、目を合わせられない。

「あの、それじゃ、僕、失礼します……」

圭が大きく頭を下げた。

「えと、その、ありがとうございます」

「うん、明日、応援しに行くから……」

「はい、頑張ります」

圭が部屋から出ていって、ホツとしたような残念なような、複雑な想いが胸をよぎった。なんとなく雰囲気が変わったような気がして、リビングを見回す。

「あれ？」

心はMDコンボや小物類が並べられているメタルシェルフの上にあるものに気付く。

「珍しい……。紫、携帯忘れて……」

手に取るうとして、かあつと顔が熱くなるのを感じた。

紫は携帯電話を二つ持っている。ビジネス用と、プライベートのお遊び用。ここにあるのは、プライベートの方だ。それが、通話状態になっていた。

「も、もしも……？」

耳に当てて、恐る恐る声をかける。

『姉さんも、いつの間にか大胆になったわね』

聞こえてきたのは笑いを堪えているときの意地悪い紫の声だった。

心は反射的に通話を切る。

「あ、あ、う……」

手の中の携帯が、とんでもない悪魔の使いのように思えた。

（双子なのに……。どうしてこんなに違うの？）

いつも考える疑問だ。心の思考回路を持っているように、紫は心の考えていることや先の行動がわかる。心は紫の考えていることを何も理解できないのに。それとも、それは心の錯覚なのだろうか。

電源を切って、携帯を元通りの場所に置いた。

紫がこの携帯で部屋の中の音を聞いていたのかすら、心にはわからない。圭の部屋にある盗聴器だって紫が仕掛けたものだ。この部屋を盗聴するための装置がないとも限らない。この携帯電話を放置していったのは、その方が心が気付きやすいから。気付かせるためにあえて、置いていった可能性だってある。その理由はわからないけれど。

はあ、と大きな溜息をつく。紫が帰ってきたら、どんな顔をすればいいのだろう。いや、どうしたら紫のように堂々としていられるのだろう。

(これくらい、誰だっしててるから……っってこと……かな?)

あの液晶の向こうにいる女優だって男とセックスしているわけだから、恥ずかしがる必要なんて最初からない。

ない。そう。ない、はずなのだ。

鬱になりそうなので、早く寝ることに決める。遅くなると言っていたから、帰ってくるまでには寝られるだろう。いつもより早めに布団に入り、けれど心はなかなか寝付けなかった。

紫が真夜中に帰ってきてても、まだ。

「早く寝ないと、寝坊するわよ」

ドアも開けないで寝ていないことに気付かれてしまい、心はどきりとする。

「明日、応援行くんでしょ？」

「……うん」

「そういうときは、素直に圭のこと考えてればいいの。せっかく仲が発展したんだから、いつもみたいにね」

「い、いつもみたいって!」

「だってそうでしょ」

からかうように言われても、事実だから否定できない。

「それにさ、圭の生ち×ぽ見たなら、想像しやすいでしょ」

何を、という言葉に出さなかった問いに対する答えを付け加えて、ドアの前から紫の気配が遠ざかっていった。

圭とエッチするところ。

心は何度もその言葉を反芻した。